

イシガケチョウが驚いたときに急ぎ身を隠す挙動はスミナガシでもまったく同じで、ぺったりと葉裏にはりついて隠れる様子はとても愛らしくて愉快。スミナガシは日本産チョウでは珍しいデザインをもち”墨流し”とは実にいいえて妙の和名命名だと思う。

スミナガシでとりわけユニークなのが口吻の真っ赤な色。好んでカシなどの樹液に集まり、この赤い口吻を伸ばしてチュウチュウと(実際はそんな音は聞こえてこないのだが、いかにもそんな感じで) 樹液を吸う。



幼虫はヤマビワ、アワブキという樹木の葉っぱを食べ、イシガケチョウでも同様の習性があるのだが、葉っぱの先端部に自らの糞をかためて葉脈に似せた細い糸状の足場をつくって常駐場所とする。スミナガシの場合は特にその細工が巧妙で、葉っぱの中脈の両側から食いちぎっていった主な足場とし、さらに幼虫の体に近い大きさの葉片をくいちぎり、それらを自ら糸を吐いてくっつけてカーテンのように複数個ぶら下げるという術をもち、見慣れた人間にはむしろそれが目印となって幼虫を簡単に見つけることができるのだが、自然界ではハチや小鳥、クモなどの外敵に対する効果的



なかくれみのだと考えられているが、実際に効果に関する検証データがあるのかどうかは不明。厳しい自然界の生存競争をいきぬいていくために、小さい幼虫がここまでの多彩な細工仕事をするとは、本当に感心するばかりである。スミナガシの終令幼虫は水牛のような大きな角状突起を頭から2本、にゅーっと突き出した異様な姿で、それまでの枯葉カーテンをぶらさげたカムフラージュ場とはおさらばして、もっぱら葉っぱの上に出てチョウになるための最後の精力的な食事に専念する。

上の葉っぱ裏へのへばりつき写真は、あまりに古い記録しかなくてきれいではないが、次の大塚さんによる HP「神戸市の蝶・お気に入りの蝶」のなかにとってもきれいな写真がある。

<http://homepage2.nifty.com/lycaena/kobe/favorite/2006/f-suminaga1.htm>

スミナガシの翅表色調の美しさをみごとに映像記録されたブログも紹介しておく。ゴマダラチョウが樹液食堂に群れている記録とともに楽しめる。

<http://floraltyou.exblog.jp/18544403/>

柿の果汁を吸うスミナガシの記録が見られるブログ (Oct.10,2009) も紹介。

<http://lycaenidae.exblog.jp/m2009-10-01/>

須崎市の大崎さんが送ってくださったスミナガシの蛹が昨夜に翅部分が黒ずんでみえ、本日の早朝 5 時半に目覚めて確認すると腹節部の広がりも観察できたため、急ぎビデオ撮影の準備をする。タテハチョウ科の羽化は、翅部分の変化が顕著でないまま羽化してしまうことをゴマダラチョウでも経験している。大崎さんからは背中中の鉤部分が透過光で空洞になってみえる、と教えていただいていた、確かに透けている。とにかく羽化の確実な兆候は腹節部が広がることだ。それでも翅が丈夫なタテハ類ではヒメヒカゲのように羽化直前になってことさら広がりが幅広くなることのないまま羽化に至ることが多い。



大崎さんからは午前中に羽化することが多いとのアドバイスもあり、10 時までには羽化するだろうと予想しながらも 6 時からビデオ撮影モードを ON 状態にして、昨日に捕獲したトラフカミキリの足や触覚を整えていたら、蛹の下にしていたチッスが赤く染まっているのに気づく。時刻



は 6 時半を過ぎているがここまで早い羽化は想定外。蛹がひび割れてスミナガシが出てくる瞬間の記録は撮れているが、翅を伸ばしていく様子が画面から外れていた。蛍光灯を照射していても羽化個体の色調をとらえるのには光量不足で、吹き流しへと移してから翅を全開として止まる得意のポーズを TG-6 で撮影すると、自動的に ON となる flash 効果もあって美しい緑色を帯びたスミナガシ独特の色調が記録できている。

貴重な蛹を提供して下さった大崎さんには感謝の気持ちでいっぱい。アオバセセリの蛹もいただいているが、こちらの羽化の場合、帯蛹から出た後どこで翅を伸ばすかが予測できなく、撮影記録がとれるかどうかは微妙。

